

第1回新淡路地域ビジョン検討委員会 議事録

1 日 時 令和2年6月17日(水) 15:00～16:30

2 場 所 洲本総合庁舎3階会議室

3 出席者

委員：山本委員長、澤田副委員長、栄井委員、片平委員、前田委員、木下委員、
堤委員、森委員、東田委員、横山委員、安居委員、原委員 (12名)

県：亀井県民局長、吉野交流渦潮室長、刃物班長、大町ビジョン班長、森川職員、
福栄

4 内 容

(1) 県民局長挨拶

4月7日より発出していた新型インフルエンザ等特別対策措置法に基づく緊急事態宣言が5月21日に解除され、兵庫県は5月末をもってすべての休業要請が解除となった。

今後の第2波への備えとともに経済社会活動の本格的な再開後の新たなステージに向け、感染症予防と社会経済活動の両立を目指し県民、事業者の皆様へ協力依頼をしているところである。

淡路県民局管内においても、これまでに10名の陽性者が確認され、県民への行動自粛や休業要請において日常生活、経済活動に多大な影響を受けているところである。

また、本県では第2波の備え、地域経済への活性化を目的とした約1120億円の6月補正予算が本日、本会議で成立したところであり、これに基づき経済支援対策等を進めていく状況である。

このような中にあり、現行ビジョンの策定から約20年、改訂から約10年が経過しようとしており、さらなる人口減少や少子高齢化の進行、また、AIやICT技術等の目覚ましい進歩など、非常に大きな変化の時代にさしかかっている。さらに、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行を機に、今後、働き方や暮らし方、経済活動のあり方など、ポストコロナ社会として大きく変化することが予想される。

そのため、今後起こりうる様々な社会情勢の変化を見通し、さらなる中長期的な地域づくりの方向性を示すべく、新たな将来ビジョンを策定することとした。世の中が大きく変化し続ける中で30年先を見通すことは非常に困難なことではあるが、本日お集まりの委員の皆様とともに検討を重ね、地域住民が共有できる将来ビジョンを策定したいと思っている。

本日より約2年間の長丁場となり、また、新型コロナウイルス感染症の第2波も心配され、ご負担も大きいことと思う、素晴らしい将来ビジョンの完成への協力をお願いし、私からの挨拶とさせていただきます。

(2) 事務局から資料説明(事務局)

資料1に沿って「淡路新地域ビジョンの検討の進め方」について説明する。事前の委員就任依頼の際にある程度説明させていただいているが再度説明させていただく。

先ほどの県民局長の挨拶でもあったが、現行ビジョンの策定から20年、改訂から10年を迎え、今後の兵庫づくりの方向性を考え直すということで、新しく新地域ビジョンをつくろうと

するものである。

新ビジョンの完成時期は、令和4年、2022年の3月を目指す。展望年次は、一世代後の概ね30年後の2050年を「展望年次」として検討を進める。新ビジョンは本庁が作る全県ビジョンと淡路地域の地域ビジョンを策定する。新ビジョンの性格は、「新全県ビジョン」が県全体の骨太な将来像を示すものであることに対して、「新地域ビジョン」は共通の特性を有する地域、ここは「淡路島」と読み替えていただき、淡路島の将来像と行動目標を示すものとなる。

「社会変化の様相を地域の特性に合わせてわかりやすく『見える化』する」、それから「住民が共有できる『なりたい姿』を大胆に描き、中長期的な地域づくりの方向性を示す」、この2点を踏まえたものにしたい。

このため、住民自らが描き、その実現を目指す「淡路地域の将来像」を描きたいと考えている。2ページをご覧いただきたい。

「新地域ビジョンの検討の進め方」であるが、まず1つ目は、本日お集まりいただいている検討委員会による検討である。

「役割」に記載しているとおり、この検討委員会は、淡路新地域ビジョンの策定主体となる。新地域ビジョンは、この検討委員会と淡路県民局の連名により策定・公表することとなる。会議については、「運営方針案」に記載しているとおり、2ヶ月に1回程度を目安に開催したいと考えている。概ね年内は現状把握を行い、12月頃に全県版の将来構想試案がとりまとめられた後、その内容を踏まえながら具体的な骨子案の検討を行いたいと思う。

基本的には毎回の議題は事務局から提示する予定であるが、委員の皆様から議題提案があればそれらについても議論していきたいと考えている。

検討の進め方の2点目は、県民との意見交換である。これらは事務局にて行う予定であるが、①から⑤に記載している形を利用して、より多くの住民の意見を委員会での議論に反映させていきたい。

特に①の地域デザイン会議については、住民グループに複数回ワークショップを行っていただき、地域デザイン案という形でとりまとめ、新地域ビジョンの骨子案の議論の参考にしたい。

こちらのワークショップの運営や地域デザイン案のとりまとめは、NPO法人の「ソーシャルデザインセンター淡路」へ委託する予定である。

3ページをご覧いただきたい。

中段の(3) SNSを活用した情報発信について、この検討委員会での議論や住民との意見交換の状況などは、随時、ホームページやSNS等を活用して発信していきたいと考えている。

次のA3の資料は、今説明した内容をスケジュールに落とし込んだものである。

上の段であるが、本日の検討委員会の発足からスタートし、一つの節目は令和3年8月の骨子案の策定、その後、具体的な新地域ビジョン案の内容の検討を行い、令和4年3月に新地域ビジョン策定という流れになる。

本日の第1回委員会では、この後説明する資料2や資料3も参考にしながら、淡路地域の魅力、あるいは課題、将来の予測などについて、委員の皆様が思っておられることをご発言いただきたいと考えている。

資料2 現行ビジョン策定以降の主な取組みと今後の課題について

この資料は、現行のビジョンである「21世紀兵庫長期ビジョン」ができた2001年度以降の主な県政の動きを整理しており、2ページ目の下には淡路地域の主な出来事を整理している。

1ページ目、全県のビジョンは一番上にある4つの社会像から構成されている。

まず、「創造的市民社会」であるが、2002年の参画共同推進条例の制定、2006年の県民交流広場事業など、県民の参画と協働による県政運営の定着を図ってきた。また、2003年の兵庫県粒子線医療センターの開設以降、順次、医療センターを開院し、医療体制を充実させてきた。このほか、県立美術館や芸術文化センターの整備など心豊かな兵庫づくりにも力を入れてきた。

次に、「しごと活性社会」では、2002年の産業集積条例の制定など企業誘致に取り組んだ結果、工場立地件数は全国でもトップクラスの実績となっている。また、SPring-8やスーパーコンピュータなど先端科学技術基盤の産業利用にも力をいれてきた。近年は、県内企業の海外展開支援、起業支援にも取り組んできた。

3つ目の「環境優先社会」では、自然災害への対応として、2002年の人と防災未来センターの開館以来、阪神・淡路大震災の経験と教訓の継承に取り組んできた。また、2003年の大型ディーゼル車運行規制、2005年の県民緑税条例制定、2006年のひょうご環境学習の実施、2007年の森林動物研究センターの開設など、環境問題への取組みや人と自然の共生を模索する取組みを行ってきた。

最後の「多彩な交流社会」では、高速道路ネットワークの整備が進み、各地で新しい道路が供用開始してきた。また、2008年小規模集落元気作戦の開始など、人口減少が著しい多自然地域の振興策を進めるほか、2010年の淡路花博2010の開催など交流人口の増加に取り組んできた。

2ページの一番下の淡路地域の主な取組みとしては、一番右の列に書いている2011年の「あわじ環境未来島構想」の特区指定をはじめ、食のブランド戦略の展開や、観光戦略の策定など、現行の地域ビジョンの目標である『環境立島あわじ』の実現を目指して各種の取組みを進めてきたところである。

3ページをご覧ください。

ここでは、各社会像に分けて、それぞれ今後想定される課題を整理している。

「創造的市民社会」では、未婚化・少子化の進行、それから超高齢社会への対応が大きな課題となる。今回の新型コロナウイルスの発生を受けた新しい生活様式の導入など、暮らし方の変化への対応が必要になる。

「しごと活性社会」では、生産年齢人口の減少、人材・資本の東京一極集中が進む中で兵庫県で働く人をどう増やすか、淡路島に言い換えると、神戸や阪神間に対して、淡路島で働く人をどう増やすか、また魅力ある産業をどう育成するか。農水産業への革新技术の導入促進なども考えていく必要がある。

「環境優先社会」では、持続可能な社会づくりを継続的にやっていく必要がある。これまでの再生可能エネルギーの活用に加え、環境汚染への対応などの課題もある。南海トラフ巨大地震への備えや頻発する豪雨災害への対応も求められている。

最後の「多彩な交流社会」では、建設から50年が経過する社会インフラの老朽化への対応、人口の減少・偏在化が進む中で空き家や未利用地の活用など、県土空間のあり方をどのように考えていくのか、また、コロナの影響による国内旅行の市場規模、インバウンド需要の変化を

踏まえた観光資源の磨き上げ、さらには外国人県民も含めた誰もが安心して暮らせる地域づくりの推進が求められる。

このように様々な課題があげられるが、新地域ビジョンの検討にあたって、淡路地域として、特に重視すべき課題は何か、また、現在は大きな課題となっていないが、今後クローズアップされる課題としてどのようなものが考えられるかなどについて皆さんのお考えをお聞かせいただければと思う。

右の四角囲みの中は、切り口を変えて課題例を挙げている。キーワードとなるものもあるかと思うので、議論の参考にさせていただきたい。

資料3 兵庫県の将来予測について

次に、議題3について説明する。まずは資料3-2をご覧ください。

昨年11月に県庁のビジョン課が作成した「兵庫県将来推計人口」の結果である。1ページの5行目に書いてあるが、新ビジョン検討の前提として、兵庫県の将来の人口規模と分布をできるだけ客観的・中立的に見通すため、2015年の国勢調査の結果と国立社会保障・人口問題研究所の将来推計を活用して推計されたものである。2015年の人口を基本に、人口の変動要因である出生・死亡・移動のそれぞれの仮定値を設定して推計している。時間の都合上、推計方法等の説明は割愛させていただき、15ページをご覧ください。

地域別・市区町別の人口推計の結果である。

一番上に兵庫県全体の将来推計人口がある。2015年は553万人に対して、2065年には348万人と、37%減少する結果となっている。新ビジョンの展望年次である2050年を見ても423万人と24%減少する予測となっている。

この表の一番下が淡路地域である。2015年は3市合わせて13万5千人。これが、2065年には3市合計で4万8千人と65%の減、2050年で見ると、約7万人と2015年の約半数に減少するとの推計結果となっている。

次に、16ページをご覧ください。年齢別の人口である。

真ん中の表10であるが、「淡路」の行をみていただくと、0歳から14歳は2015年の1万6千人に対して、2065年には3千8百人と大きく減少する、また、15歳から64歳の人口も2015年の7万3千人に対して、2065年は1万9千人と大きく減少する。

一方、下の段を見ていただくと、65歳以上は、絶対数としては、2015年の4万6千人から2万4千人と約半分になるが、全体に占める割合は51.3%と、淡路に住んでいる人の半分以上が65歳以上になっている。

人口の変動だけが将来像を考える指標ではないが、将来推計人口を参照しながら、このような人口減少や人口構造の変化を前提に考える必要があり、その中での地域づくりの方向性をビジョンとして示していくことになる。

資料3は、2050年のイメージとして作成している。当面の基盤整備、地域の姿、地域づくりの方向性を兵庫県全体と淡路地域について記載している。

課題等は先ほどの資料2でご紹介した課題などと重複する部分もあるが、こういった内容なども参考にさせていただきながら、この後、皆さんが感じておられることなどをお聞かせいただきたい。

(3) 意見交換

[委員]

人口推計のデータを見るとかなり衝撃的な数字が並んでいると思うが、これは今のままの社会構造であったり流入人口が変わらないであったり、少子化が止まらないといった場合のデータということでしょうか。

[事務局]

基本的には2010年から2015年の人口の動きをベースに、一定の補正を加えて推計されているものである。その5年間で人口が増えている地域については、そのまま増え続けていくことは今の状況ではありえないのでそのあたりは補正を加えている。

[委員]

いずれにしても、これだけ急激に人口が減るかどうかは別としても、人口が減るということは確かだと思う。そういった前提で淡路島のビジョンをどう作っていくかということで、皆さんご発言いただければと思う。

[委員]

淡路市地域おこし協力隊として3年間で100名以上の移住に関わってきたが、東京から淡路島に来たいという人がけっこういる。東京で活躍されるような方が淡路に来て商売を営みたいという方がすごく多い。そういう方の受け入れにあたり、経済的支援と社会的支援でまだまだ個人事業主を応援するような制度がないと思っていたので、県の方が率先して移住して商売を始めたいという方の支援が増えればいいと思っている。資料のデータには、移住者に関しての数値がないが今後とられる予定とかはあるのか。

[事務局]

大きな移動のデータとしては既に将来推計人口に加味されている。移住の関係では特に市町において地域創生の中で詳しく捉えているような対策がとられていると思う。

[委員]

協力隊の活動をしているときに各市でどれくらい移住者が増えたかというデータがとられてなかったように思う。

[委員]

何を持って移住者とするかが難しい。南あわじ市ではマイホーム取得事業補助金などいろいろな補助制度があり、そういった制度を活用して来られた方を移住者としてカウントしたり、農業で新規就農された方がどれくらいいるかという形ではある程度確認させていただいているので、そのあたりの数値は提供できると思う。

[事務局]

基本的には住民基本台帳で他市から来られた方の数字を使っている。

[事務局]

私の知っている限りでは、統計的に移動したという方はわかるかもしれないが、移住者というくくりが非常に曖昧で、人によって移住者の定義が全然違うので栄井委員が言ったように補助制度を使って移ってきた人が何人というのはわかるが、移住者という定義がなかなか難しい。

[委員]

ある地域で、パン屋さんがほしいとかバーをやってほしいといったときに、人をつなげていてその地域に必要な人が来る形がこれから淡路島でももっともっと広がらなければいけないのかなと思っている。

[委員]

観光面で移住と京阪神以外からの入込をどうするかという事に関してはどう考えているか。

[委員]

淡路島に来ていただくためにどういうものを打ち出していくか、商品力を強化しないとなかなか淡路島に来たり、移住したりということにつながらない。福良の組合長とは10数年、食を売り出す活動を観光協会などでPRしている。3年トラフグができて17、8年目くらいだが3年トラフグという名前が付く前からそれをどう集客につなげられるかなど食の魅力を高める活動をして、ようやく関西で淡路島は食が豊かな島だということが知れ渡り、最近リピーターが多くなった。しかし、関東に行くときっぱり通用しない。

淡路の食材は関東でもヒットしているという実感を持っている人は多いと思うが、絶対数でいうと私が淡路に帰ってきたときは関東エリアから宿泊に来る人は約2パーセントでこの20年間に増えたと言っても5～6%である。それをなんとか増やしていきたいし、遠くの方にどういうことをアピールするかということに常に考えている。

[委員]

もともとは「3年トラフグ」と言う名前はなく、3年間経ったトラフグだったのが、だんだんとマスコミに取り上げられることによって知れ渡り、地元のホテルや旅館でも使ってもらうようになり急激に関西で知れ渡っていった。東京へ行ったらまだまだ知れ渡っていないのもっとPRして東京からも来てほしい。

淡路島はトラフグだけではなく、天然の魚もすごくおいしい。東京の築地を歩いていたら、たまたま店の人が客に淡路島の天然の鯛をすすめていて、淡路島の魚は東京でも人気があることがわかった。それを目当てに関西や東京からも何回も来てもらい最終的に淡路島に住もうという人が出てくればいい。

[委員]

宣伝は大事だと思う。また、地元の方が知るといってもかなり重要なことだと思う。農業はかなり新規で入られている方がいると思うが、そのあたりの入り方や次につなげることについてどう考えているか。

[委員]

私自身も10年くらい前に移住してきた。農業の統計を見ていると新規就農者数は県域で毎年300人ぐらいいるが、雇用就農とUターンが8～9割、Iターンの完全な新規就農は1割くらいと認識している。新規就農が成り立たずIターンの9割がやめても全体統計では1割程度しかやめてないことになるのでうまくいっているという見え方になる。新規就農者は続かないというのが現状だと思う。そこはやはり生活基盤が安定しているうえで、いい物を1年、2年、3年と年数をかけて作っていかなければならない。その基盤を私たちはグループ化して、協同組織でカバーしている。

葉物野菜の現金回収率は種を蒔いてから50日ぐらいで収穫開始、そこから販売して1ヶ月

2ヶ月で回収していくので4ヶ月くらいで現金化できるが、おそらく南あわじのタマネギだと現金回収まで1年くらいかかる。私たちのグループの場合、タマネギ農家に対しては収穫した段階でお金を支払い、葉物農家には少し待ってもらうような形でバランスをとることが安心につながっている。

あと、担い手を増やすうえで雇用就農を増やしていかなければいけないので受け皿としての会社、組織が必要と思う。独立したい人ばかりではなく農業に関わりながら会社員として働きたい人もいる。

課題としては、住む場所と農地がリンクしていないこと。いい農地が見つかり作物をしたいけどその周辺には家がないとか、家は見つかったけどその周辺には適した農地が見つからないなど、仕事と住まいがリンクしていない。

[委員]

具体的な提案をいただきありがとうございます。防災と人という関係で何かないか。

[委員]

淡路島は防災というのが裏に隠れている。9期ビジョン委員会の防災分科会では淡路島の観光地をすべて委員で巡り、各観光施設の防災を見る研修をした。火災対策をきちんとできているところもあったが、例えば非常口が1カ所しかないところもある。実際に起こったときにどうするか聞いてみると、「まずは職員の指示に従って・・・」というような感じで練習してないなということもあった。実際に建物が古すぎて構造上どうしようもないところも結構ある。淡路島は災害がものすごく怖いところだけど、対策がきちんとできているからお客さんを安心して迎えられるということが大事だと思う。

資料のデータについては、南海トラフや豪雨にしても一方向から見たデータである。南海トラフも豪雨も多発する可能性がある。今回のコロナ騒ぎでも危機管理からいうと自然災害よりも目に見えない怖さがあったと思う。淡路島で老後を過ごして人生を終える中で、人口がどんどん減っていき安心して楽しく暮していけるのかと考えた。もちろんインバウンドで外国人が来ていただいて島が活性化して産業が栄えるという経済活動は前提だが、このまま年をとって死んでいけるのかと最近家族で考えるようになった。自営業の方が増えて小さいコミュニティでそのエリアだけで生活が成り立つような、今回のように自粛生活が続く中でも小さいコミュニティで確立するような町が島の中にたくさんあるならば移住者も増えてくると思う。人口をみても、淡路島の島民だけでは増えないことは確実である。島外からはもちろん、外国人の方も含めて定住する方が増えていかなければ自然いっぱいの環境島でも無人島になる可能性もある。そうなれば淡路島全体が太陽光パネルだらけになるかもしれない。防災に関してもみんな考えて安心して暮らせるようなにしたい。南海トラフを避けることは無理で、起こったときに町内会よりももっと小さい単位で協力して動けないと大変なことになると思う。

普段からイベントの中でも協力体制を組めるようなことができないかと思う。法律上難しいのかもしれないが、例えば、子どもの送迎が両親共働きで大変なのであれば、年寄りのデイサービスの空いた車で送迎してもかまわないと思う。そのようなことが臨機応変に出来ないか。私たちが子どもの頃の良い面を復活させて人と人の関わりで信頼できるような田舎作りが出来ることが何かないかなと感じている。

[委員]

田舎作りというのは言葉としても良い響きを持っていると思う。

[委員]

いろんな高齢者と接する中で、今話し合っているかなり長期的な将来のことはなかなか考えられず、そんなに先の事を考えてもしかたないという方が大半で、先ほどの防災にしても津波が来ると言っても来たらしょうがないという方が多い。その中で、統計データでも人口がどんどん減っていき半分以上が65歳以上になっていく地域の中で、自分たちはどうやって年を重ねて淡路島で暮していけるかということのを今のうちに考えていけるような体制を作っていけないと思っている。啓発運動に関しては、様々な取組がされているがそれを周知していく部分でまだ知らないことや、聞いたことがないことがある。例えば認知症サポーターといってオレンジリングがくれる講座があり続けてはいるが、いざ認知症サポーターになった方が具体的にどういう活躍をしていただけるかということまで出来ていない。歳をとることは避けられないので、歳をとればどうなるかということのを今のうちから知っておいて、そうなるからも淡路島で暮していくために何を取り組んでいくかということのを発信していかないとはいけないと思っている。特に認知症サポーター養成講座を小学生にも受講してもらっており、そういったことが学校の教育の中で取り入れていければ良いと思う。自分が65歳になったときにその年齢で活躍できる場所っていうのが必ずあるべきだと思うし、何もなければそういう場所もなくなるし、そういうことを発信していけたらと思っている。

[委員]

人とのつながりということで文化的な部分もビジョンの中に入ってくるのではと感じているが、そういう面で何かないか。

[委員]

私も淡路島に来る前の約7年、淡路島に来てからも老人ホームでアルバイトをしていたので文化的というよりも福祉の視点になってしまうが、原委員が言ったような小規模で動けるようなことをやりたいと思っている。富山県には、お年寄り子どもと障害のある方たちを1つの公民館を改修したような場所で縦の垣根もなく預かっている富山型のデイサービスというのがたくさんあり、それを淡路でもやりたいと思って調べたりもしている。実際やろうとした方が何人かいたが、10年前は制度的な部分で難しかった。最近、国がすすめているのでそろそろ出来るのではないかと個人的に思っている。今回のコロナの状況でも地域がそんなに動かずに人が交流できる場所があれば安心して介護が続けていけると思う。私は女性消防団に入っていて操法訓練を初めて体験させてもらったが、最初は水をかけるだけでも出来なかったが、何回かやるとコツをつかんで出来るようになった。普段から消防団に関わりがない人は知らないだろうし、小学校の運動会とかでやればおもしろいのではないかと話をしてきた。日頃から防災であったり、いろんなことに関われる仕組み作りが出来るのではないかと最近思っている。書道のパフォーマンスでも障害のある方も子どもも一緒にやっていきたいと思っている。横のつながりが出来ていくような場づくりができるように書道のパフォーマンスを続けたいと思っている。

今回、この新地域ビジョン検討委員会という名前で話を進めていくことにすごく興味がある。最近読んだ本に、ビジョンとは自分がこうしたいというのを考えていくこと、ミッションとは

もともと決められていることと書かれていて、この話をいただいたときに淡路島のミッションとは何かということを考え始めた。そういう視点で考えていくのもおもしろいのではないかと思う。

地域おこし協力隊の時は歴史担当として活動させていただき、国生みの島として日本遺産にもなっている淡路島というのは世界から見てどういう意味合いがあるのだろうと最近考えている。

[委員]

ビジョンに対してミッションも並行して考えていく必要があると思う。女性の農業グループをやっている中で感じていることはないか。

[委員]

私も元々淡路出身ではないが、農業することが楽しかったので、それをみんなに伝えたいと思い農業女子というグループで活動している。淡路島を外から見て何が一番となると観光であったり食であったりするが、農業はダサイというイメージが正直あった。でもやってみるとすごく楽しかったので農業に携わっていてわかったことを発信していったら結構賛同してくれる人が多かった。淡路島に生まれて育った人たちが知らないことが多かった。自分の子ども達に淡路島の良さを伝えていき、淡路の外の人たちにもその魅力を発信して移住していただいたり観光に来ていただいたり、まず自分がいる場所でやっていることをかっこよく見せたい。

農水省のプロジェクトに参加してから他の地域のことを知って淡路島のことを知ろうと思って地域資源について調べたが、淡路島には魅力や資源がたくさんあると思った。子どもたちや同世代の友達もそうだが自分の地域のことをわかっていない人がたくさんいると思うのもっとも自分の地域のことを知って良さを発見して、子どもたちに学校で勉強している淡路島魅力を島外の大学とかに行っても発信してほしい。

[委員]

魅力を魅力として伝えられるように知る必要があると思う。

食、福祉、防災の部分など目に見えている話が多くなっているが、今、気候変動がかなり多くて農業や水産業は自然の影響が非常に大きい。そういう面から見たときにどういうことを考えておいた方が良いのか、そういう視点で少しコメントをいただければと思う。

[委員]

最初に説明のあった淡路の将来像で人口がものすごく減っていくことが見えているが、今の状況をそのまま延長したときにこうなるというのが数値で現れているのだと思う。おそらく流入人口が増えてくる事を加味すれば全然違う数値になると思っていて、淡路島に関しては過小評価がされていると思っている。淡路島には強みがあって、まず何よりも島ということ。島という事自体が兵庫県の中では独自の価値を持っているエリアであり、観光あるいは移住先として考えたときにも島はすごく魅力的である。沖縄の離島に住みたい人は山ほどいるし、旅行に行こうと思ったときも隠岐の島や佐渡島などいろんな島がある。都市から近いところにあり瀬戸内海最大の島として他にはない魅力がすごくあるが、島らしさという物がだんだん薄れていきつつある一方で、島らしさを観光にうまく活かしているところもあると思っている。

自然環境の部分では自然に根ざした生き物文化にはものすごく地域性がある。生き物の種類は地域ごとに違う。淡路には淡路の、瀬戸内海には瀬戸内海の魚がいて他の地域と違う物がと

れる。そういったことがトータルで魅力になって独自の価値を淡路島は持ちやすいと思っている。ただ、儲かる農業が出来なければ農家が増えないという話もあったが、今回のコロナでもリモートで出来ることがわかった。資料にも技術革新の余地があるのは農業だとあるが、そうなったときに都会で働くとしても、週休3日であれば淡路に住みながらリモートで働き、週休3日のうち1日は農業が出来ることがたくさん出てきそうである。そうなれば空き家や持ち主のいない農地がどんどん使えるようになり暮らしやすい淡路島が出てくるんだろうと思う。

30年後を考えたときに自然の魅力と農業、漁業という魅力、すべて地域らしさがあると思う。それに文化や歴史が相まって風景や島の魅力を作っていくんだろうと思う。

そこでしっかりと人が暮らせるようにするには子育てがしやすいかどうか。淡路島はすごく子育てがしやすいと思っている。あとは歳をとったときに介護の部分をしっかりすればものすごく魅力的な地域になるだろうから、夢はたくさん描けそうだなと思う。インバウンドも全国平均より淡路が少ないということだが、まだまだ淡路島の魅力が知られていないだけなので伸びしろの塊だと思っている。

[委員]

地域の魅力を掘り起こしていくようなことを何回か続けたいと思う。本日はこれで終了する。